徳島市議会議員 梯学

市議会だより

明日への かけはし通信 No.02
2023年 1月発行

発行：徳島市議会議員　かけはし学事務所
770-0824 徳島市南出来島町2丁目

私の見た市議会風景

会派内控室壁際に、事務局員呼び出しベルが設置されており、そのボタンを押すと内線がコールされ、『何か御用ですか?』という声が返ってきます。『コーヒーを』と頼むと、間髪入れずにコーヒーが用意されます。ほかにも『昼食はいかがしますか?』とか『先生、何か御用でしょうか?』と、まるで、私設秘書そのままのような対応です。議会内では、私たちはまさしく特権者扱い（?）なのだと感じます。（もちろん、諸経費として毎月1万円は自己負担していますが…）

会議のスタート時間は大体が10時です。提出議案が多くなければ、午前中で終わることがほとんどです。会議の予定がなければ、議会への出勤も全くの自由です。議会では、委員会、本会議、会派内会議、会派間協議、時には行政視察などにも出かけるなど、色々な議論の場が用意されています。それらの場も、議員間、職員間のフリートークの場なのかといえば、そうではありません。当選回数であったり、会派の論理であったり、よくわからない力の論理によって発言力が変わってきます。

1年生議員の私に対しては、職員さんも、まだまだ聴く耳を持ってくれていないように感じます。私の実力不足を痛感いたします…。足し算の世界の、一つの駒に過ぎないのかもしれません??

与党会派が5会派、野党会派が2会派あり、大体の話はこの5会派間の話し合いで決定されます。その中でも、与党会派の実力者の意見によって理事者側に対する方向性が決まっていきます。特に重要事項であればあるほど、市幹部と数人の実力者間の話し合いで決まっているようです。私には決定事項に対して、市長与党だからというだけの理由で賛成することが求められます。

この3年間、幾度となく会派内で意見が分かれ、賛成・反対で苦悩することもありました。例えば、遠藤前市長への損害金の賠償請求、遠藤市政時の保育園整備の撤回、遠藤市政時代の木工会館閉館に対する対応などです。私の所属する会派は、是々非々を基本に、会派内で時として話し合いがもたれ、大概は一致して行動を共にしています。時には100％自分の意見が通らないということにも直面しましたが、全体を考え行動することもありました。

そして、今日という日を迎えています。これまでの重要事項における私の考えは、本日お配りいたしましたリーフレットに記載させていただきました。

ゴミ焼却場建設、広域か単独か？

現在、徳島市ではごみ焼却場の新規移転について議論が進められています。前々市長時代から積み残された課題であります。

徳島市では、論田町にある東部環境事業所、国府町にある西部環境事業所において市民の出すゴミを処理していますが、両事業所とも耐用年数が限界を迎え、移転が急務であります。

そのような状況下において、周辺市町との広域処理施設建設にむけ協議がなされていましたが、他の市町との種々の条件面での調整に難航し、内藤市政においては単独整備へと舵をきりました。

この判断においては、広域か単独か、どちらがより徳島市民の利益に供することとなるのかが、議論の中心であります。

ゴミ焼却場は建設場所に選定された地域住民の理解を得ることが最優先であり、これまで、佐那河内、多家良町、そして今回選定されたマリンピア沖洲において、多くの反対の意見が出され、そのたびに建設候補地が変更されるなど、整備に時間を要しています。

また、広域連携参加市町間の利害関係の調整にも時間を要し、現在まで整備が進んでいないのが現状であります。しかし、現在使われている焼却場の老朽化は進み、論田焼却場に至っては耐用年数を大きく越えて稼働させており、今回のマリンピアでの建設はどうしても進めなければならない事業であります。

ごみ焼却場建設問題は、どこの地方公共団体においても抱えている課題の一つであり、時の首長の最大の懸案事項の一つであります。

『焼却場の建設は賛成だけれど、私の地域での建設は反対です。』という意見を説得しつつ、その上、『なぜ他市町のゴミも私たちの地域で受け入れなければならないの』、という意見にも耳を傾けるとなると、建設が全く進まないということになります。

徳島市長の最大のミッションが、**徳島市民の利益確保**が最優先ということであるのであれば、他市町との広域連携によるデメリット（ex、収集車の通行量）を如何に評価するのか、広域連携によるメリット（ex、広域経済圏の確立）は何なのかを、どのように考えるのか。

徳島市の考えとしては、まず早急に新規焼却場を単独で整備し、並行して他市町のゴミをどのように受け入れていくのか、ということで進めていくことが最善の策であると判断しています。

徳島市議会 議員定数について!?

現在30名。

この数字が多いのか、少ないのか？ 一般市民の感覚からすれば、30名は多いと映るのかもしれません。私も、市政の課題が何もない無風状態であれば30人もいらないのではと思います。

議論も十分になされないまま、理事者からあげられる案件に対して審議するだけなら、20人もいたら十分なのかもしれません。

しかし、現在の徳島市政は対立の構図の中で運営がなされています。過去何年も課題となっている案件が山積されています。そのような状況下、来春に行われる次回徳島市議会議員選挙において定足数を減じるということは、その結果によっては、ますます対立の構図を煽ることとなります。

民主主義の最大の課題は、民意をどのように評価するのかということであり、民意の表明が現在では選挙ということになります。現代の社会においては、選挙という民意表明機会だけでは十分に市民の皆様の意思が反映されなくなっているのも事実でありますが、やっぱり選挙における意思表示というのは、現時点での最良の方策ということになるのかもしれません。

議員数を減じるということは、その過半数で決まる施策の決定過程において、市民の民意が数の力によって間違った方向へミスリードされてしまう恐れがあるように思います。

また、市議会へ民意を届けようとする力を排除することにもつながり、軽々に定足数を減じれば良いということにはならないのではないかと考えています。

裏面もご覧ください。

徳島市議会議員　梯 学

『元気に有意義に生きることのできるまちづくり』を考える…!!

年の初めの新聞記事を読むと、徳島県の人口が本年度中にも70万人を切るそうです。人口減少を少子化、そして若者の県外流出を起因として問題化していますが、若い夫婦が子供を産まなくなったのが悪いことなのでしょうか?

若者たちが都会での生活を夢見て、この町を離れることが悪いことなのでしょうか?

人には人それぞれの生き方があっていいはずです。人が減ると地域が疲弊するからと、若者ばかりに地域活力の推進を押し付けていいのでしょうか?

この町の活力は、この町に住む全員が考えなければならないのです。

❶ 住みたいまち
❷ 働けるまち
❸ 訪れたいまち

これらを地域の課題に掲げているところは、日本国中どこにでもあります。でも、それらを本気になって地域住民が一丸となって取り組んでいる地域は多くありません。

人生100年時代と言われます。これは、寿命が延び高齢者が増えるという意味ではなく、元気に、楽しく、有意義に生きることのできる時間が増えたということなのです。

昭和の時代は55歳が定年でした。でも、令和の時代には70歳、いや75歳までは十分に働くことのできる時間を神様は与えてくれたのです。

20年人生が延び、その結果、若く生きられる時間を多く手に入れることができたのです。

それでは、この伸びた時間を有意義に過ごすためには、どのようにしなければならないのでしょう?

健康に生きるためには何が必要なのでしょう?
楽しい時間を手に入れるためには、何をしなければならないのでしょう?

これから私たちは**『長く生きる』ことを目標にするのではなく、『元気に有意義に生きる』**ということを人生の目標にしていかなければなりません。

『健康寿命』という言葉があります。

多くの人々が健康に長く生きるためには、どのようにすればいいのでしょう?

これからの行政は、この課題に取り組んでいかなければならないのです。もちろん、不幸にして健康を得られない人たちに手を差し伸べることは考えられるべきですが、やはり、健康に生きられる社会創造を大前提に、地域設計しなければならないのです。

人間関係の核をなすのは家族です。家族という核の外側には、親しい友人たち。親しい友人は人の幸福度と人生の満足度を大きく左右します。その外側には、職場で働く友人たちなど,それほど長期的ではない人的ネットワークが存在します。そして、その外側に位置するのが地域コミュニティと隣人たちということなります。さらに外側には、いくつもの地域コミュニティの相互作用により形作られる社会が存在します。平均寿命が延びると、同時期にいくつもの世代が生きている状況が生まれます。理想は、人々が世代を超えて資源を共有し、互いに助け合い、大切にしあうことなのです。これから必要になってくるのは、世代間対立を生み出すのではなく、異なる世代の協力を促すような仕組みづくりなのです。

徳島市には23の行政区があり、それぞれに地域の特性があります。商業を中心とした地域、生活の場としての地域、生産を中心とした地域と、それぞれの地域の特徴に合わせた地域づくりに取組まなければなりません。地域の特徴に合わせた街づくりを担うのが、地域コミュニティを形成する各地区の協議会であり、学校を中心としたPTA、そして目的に合わせて形成される各種ボランティア団体などなのです。

そこで先に挙げた課題へと戻っていきます。

❶住みたいまち　❷働けるまち　❸訪れたいまち

この課題に取り組むことが、まさしく『元気に有意義に生きることのできるまちづくり』ということになるのです。

住みたいまちってどんな町？
働けるまちってどんな町？
訪れたいまちってどんな町？

これらを丁寧に、でも迅速に議論して、その一つひとつをみんなで創り上げていくことこそが、**住民参加による地域自治**の姿なのかもしれません。

これからは決して**裕福ではないまでも、幸福度を高めて生きていく**ことが大切なのです。幸福度の高い社会は住みやすい社会でもあるので、そこに良質で高単価な外国人を含む旅行者が来てくれるし、リモートワークの時代、職種によってはグローバル人材も移り住んでくるかもしれません。

自分自身の幸せを優先して生きていく。自分の才覚をもって勝負をかけるのも、身の丈に合った幸せで満足するのも、どちらが尊いということはなく、幸福に生きるのが一番大事なのです。現代における個人の豊かさとは何でしょう?

『みんな横並び』で突き進んでいく、昭和的な価値観ではありません。『昭和的な価値観』から自由になって自分らしく生きることが、現代において個人の豊かさ、幸せを叶えていく方法であります。

国家や地方公共団体は、もはやトップダウンで私たちの進むべき道を示す存在ではなくなっています。昭和のシステムが、イノベーション競争時代、個人の才覚や発想がモノを言う時代に対応できず、経済全体、国民全体が相対貧困化したことが、いろいろな問題を引き起こしているのです。

個人が変われば、その集合体である社会が変わり、その社会から国家や地域の運営を任されている政府も地方公共団体も、ついには変わっていくことになる。

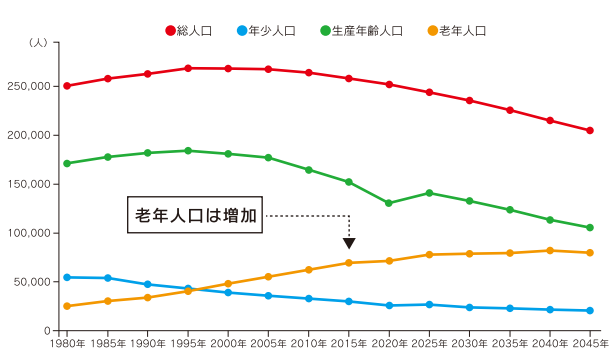
社会はボトムアップでしか変わらないのです。具体的に何の法律や政令や条例、制度などをいじれば社会はよくなるのだろうか、自分自身は生きやすくなるのだろうか、について考えることが大切です。思いつきでも妄想でもいいから提案していく、こうした個人の小さな思いつき、妄想による提案の一つひとつがボトムアップ型の社会変革の原動力となっていくのです。

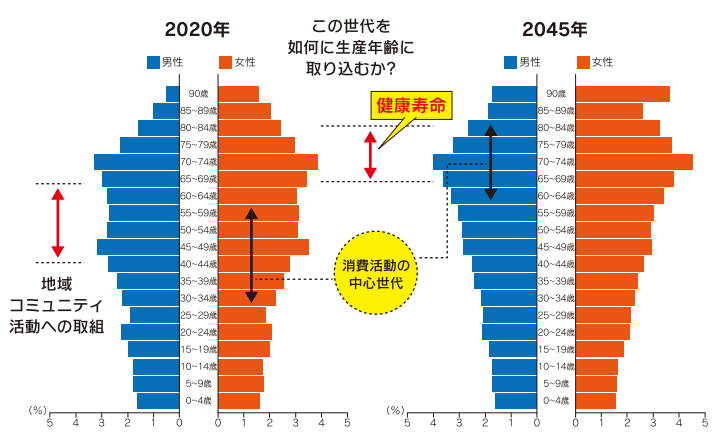
これからの徳島市においては、市民の思いつきをどのように吸い上げていくのか、地域の意思をどのようにして政策にまで仕上げていくのか、大切な課題であります。令和の時代の政策決定方法を、作り上げていくことが大切なのです。

地域・地区ごとの課題を地域住民自らが解決に向けて取組む努力をする、そして、地方公共団体としての徳島市は、その努力に対して後方から支援をするという仕組みづくりをしていかなければならないのです。

『令和の時代の民主主義』を確立できたまちこそが、『元気に有意義に生きることのできるまち』なのです。

徳島市の将来推計人口を考える





健康に長生きするためには好奇心を満たせる場所がなければならない。そう考えると地方都市は人々が集う、ちょっとした映画館とか、お寺とか教会とか、今あるものを生かして生活を楽しむことが大切です。　（建築家　安藤忠雄さん）

今、力を入れるべきなのは、老化のプロセスを改善して、社会の高齢化が医療費支出と国家財政に及ぼす影響を和らげること。最も効果が期待できる対策は、医療システムの主眼を治療から予防へ転換し、人々の健康寿命を延ばすというもの。
（100年時代の行動戦略　アンドリュー・スコット）

人々が健康的に年を重ねるためには、好奇心を満たせる場の提供が必要である。そのためには、異なる世代の協力を促すような制度を設計し、世代間の共感を育まなければならない。これらの場こそが、すなわち地域コミュニティなのである。